

はじめに

滋賀県大津市のいじめ自殺事件以来、いじめの問題が再び大きくクローズアップされるようになりました。教育相談や生徒指導にかかわっている大学教員として何らかの社会的な責任を果たす必要を感じ、今回の出版に至りました。

この本の特徴は、「いじめは加害者がいなければ起こらない」、さらに言えば「いじめがなければ、被害者も加害者も生まれない」という観点に立っています。そしてこのような観点こそが重要だと思っています。なぜなら、実は加害行為によって傷ついているのは被害者だけではなく、加害者本人もだからです。

実際、いじめの加害者は、加害者になる以前にいじめの被害者だったり、家庭的な問題の被害者だったりすることも少なくありません。そのやり場のない思いや怒りを解消するすべを知らず、加害的で攻撃的な行動以外の選択肢を持っていないことが多いのです。ですから、この本は、「いじめを防ぐことによって、被害者も加害者もつくりたくない」という発想に立っています。「いじめから子どもたちを守る」ということです。「加害者が加害的な行動をしなくてすむような教育プログラムを用意し、同時に加害者が受け入れられるような学級風土を形成していくことによって加害行動を止めていく」ということがこの本の基本的な発想です。

ところで、この10年、私は広島大学で学生の指導をしてきましたが、数年前、私の上述のような考え方を理解し、いじめ防止プログラムの開発に取り組んだ学生がいました。それが現在は佐賀県で小学校教諭をしている松瀬明香先生です。本書の第2章は彼女の卒業論文が下敷きになっています。

その後、そのプログラムをゼミの卒業生たちをはじめ関係のある先生方に実践してもらい、データやアイデアをもらって修正を加えてきました。また、その検証には、栗原ゼミの中村孝君が取り組みました。さらにオリジナルは小学生版であったこのプログラムを中高生でも使えるように、元中学校の教員で非行問題に長くかかわってきた県立広島大学の金山健一先生に手を加えてもらいました。

そういう意味で、本書は文字どおり「いろいろな人たちの力によって生まれた本」です。また、このプログラムは完成版ではないと思っています。実践していただき、感想やご意見をいただき、修正を加えて、もっといろいろな先生方の役に立つ、そして子どもたちの幸せの役に立つ本に仕上げていくことができると考えています。

2013年4月

栗原 慎二